

684  
2017年  
7月発行

# よろこびの泉

わたし(イエス・キリスト)が与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

新約聖書 ヨハネ4:14



夏を感じて

## 今日一日も

水野源三

新聞のにおいに朝を感じ

冷たい水のうまさを感じ

風鈴の音の涼しさに夕ぐれを感じ

かえるの声はつきりして夜を感じ

今日一日も終わりぬ

一つの事一つの事に

神さまの恵みと愛を感じて

水野源三詩集「わが恵み汝に足れり」より

作者は小学四年の時、赤痢の高熱から脳膜炎を発症、首から下の機能を失う。十二歳の時聖書に出会いイエス・キリストを信じ、残された機能、目の働きにより詩を作られた。

発行所 奈良県生駒市門前町七一四〇 日本ミッション  
〒630-0266 電話〇七四三(七三)一七五四 振替口座〇〇九三〇一六六四二番

発行人 ファアベイ・D  
編集人 日本ミッション編集部

印刷所 埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇  
〒350-0303 新生宣教師印刷部  
電話〇四九(二九六)〇七二七

一年分 送料共 九〇〇円  
定価 一部 一八円



**問** 村には就職口がなく、実家の農業は継ぎたくなくて、都会に出て十年。コンビニで深夜勤務のアルバイトや路上のティッシュ配りでつなぐ僕は、将来に何の希望もなく流れに漂う浮き草のよう。この生活から抜け出したいです。

**答** 産業のあらゆる分野がグローバル化して、大量の製造業が、原料と人件費の安い外国に工場を移転し産業の空洞化が進んでいます。日本に残る会社も生き残るための合理化が人材にまで及び、少数の高度な知識者や専門技術者は高い給料で繋ぎ止め、それ以外の単純労働は、人材派遣からのパートやアルバイトに替え、さらに人口過剰の途上国から大挙してやって来る若者たちに目を付けます。彼らは日本人のパートよりさらに安い賃金で働くので、企業は雇うのです。こうして激しい賃金格差を生じ日本の若者の働き場は奪われてしまいます。

世の中がすべてお金で動く社会となり、目に見えるものしか信じない表面的な価値観にとらわれています。目に見えるものだけで自分探しをしようとすれば、今の閉塞的な社会の出口は塞がれています。部屋に蜂が一匹入り込んで、外にでようと、ガラス窓に頭を何回もぶつけて力つき、窓の内側で死んでいるのを見ることがあります。

「反対側の扉は開いているのに、方向を変えて出て行く知恵がないのです。人生も発想を変えて逆の見方をしてみましよう。」

私は二〇代の六年間療養生活をしました。五年経って退院が見え始め、仕事を捜そうといろいろな本を読んでいた時、聖書を買ったのです。当時の私にとって仕事は死活問題で、キリスト教(宗教学)なんかと思いましたが、貰った手前もあって読んでいくうちに、神様の存在が分かり、キリスト教の世界の大きさ、広さ、豊かさ、知恵の深さを感じ、この方に生涯をかけてみようと思心しました。二十八歳で人生ゼロからの再出発でしたが、聖書を更に学んで牧師になり、以来五三年、八二歳の今も充実した毎日を送っています。あなたも是非聖書に出会い人生を変えて下さい。

「自分のからだを持って、神の栄光を現わしなさい。」(第一コリント6:20)

(児玉 博之)

## 親子のしあわせ 393

私には、大学三年の長男と、高二、中二のふたりの女の子がいます。長男は、名古屋でひとり暮らしで、時々「米、送って」とメールが来ます。私が「もう無いの?」と聞くと、「大学へおにぎり握って持って行つて」と言うのです。ちよつと驚きました。自分で握る? コンビニもあるのに。節約もあるでしょうが、コンビニ弁当は飽きるのかもしれない。とにかく、自分で作ることは嬉しいことです。

私は、毎朝三つぐらいのお弁当を作ります。長女、次女と私の(私が給食の時主人の物になることも)です。

長男が冷凍食品を好まなかったからか、娘たちも好きではありません。ですから冷食は買いません。総菜は時々買います。とにかく、夜に翌日の弁当の予定を頭に入れ、または下準備をして休みます。そして朝に弁当を作って持たせます。夜、カラになった弁当箱を見て、「よかった」と自己満足です。次女が、「隣の子が、おいしそうなの弁当で褒めてくれたよ」と言ってくれ



ます。褒められて、お母さんはまた明日もがんばるのです。もちろん、気分が乗らず悩むこともあります。

『食』は、大切ですが、お母さんが作ってくれた...それだけで子どもは嬉しいのです。キャラ弁でなくても。園で働いていますが、子どもたちがお弁当を開けるときの顔は本当に嬉しそうです。同じ物ばかりだと飽きますから、ちよつとした工夫も必要です。お母さん方は本当ががんばっていますしその頑張り子どもたちに通じています。

『食』は又、楽しむことが大切ではないかと思えます。だから誰かと一緒に食べ、会話することが大切だと思っています。娘たちと一緒に食事をする、今日の友だちとの話、部活のこと、先生のことが話題に上り、様子がよくわかります。思春期だからこそ、一緒に食事を取ることが心がけています。

「イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。」(ヨハネ21:13) イエスさまも、みんなと食事を楽しまれたよう

です。

(相原 幸紀美)

\*この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。



# よろこびがいつばい 息子、私、そして母へ

兵庫県伊丹市 香川 純子

今から39年前、私は、ただ生きてると言うだけの毎日でしたが、そこから抜け出す方法もその道も知りませんでした。ある日、息子が盲腸炎になり救急車で淀川キリスト教病院へ運ばれ手術を受けました。ここまではありきたりなことですが、ここから先に思いがけないことが待っていたのです。



▲最寄り駅の構内で

## 生い立ち

私は一九三四年一月生まれ、現在八十三歳です。

父は商才に優れ経済力のある人だったようですが、家族にとっては良い人とは言えませんでした。なぜなら、儲けたお金は自分の為には惜しげ無く使い、散々遊んだ末、ひとりの芸者さんを引かせて自分の妾にし、その人と住むために家を出て行きました。私が五歳の時です。でも離婚はしなかったようで、そのために家の中はいつもごちゃごちゃしていました。

父が出た後、家の中は祖母(父の母)と母と私の三人。それに近所には伯母(父の姉)がいて、私に経済的不自由はありませんでした。父から伯母経由でお金が届いていました。ただ、進学の時、英語をもっと勉強したいという私に「女に勉強はいらん」と言って理解されず、勉強できなかつたことで私は父を恨みました。

## 年頃になって

父には私と一緒にさせようとしている人があったのに、私は別に好きな人が出来て、ところがその人は父から駄目だと止められていた人だったので、私は家出をし、その人と一緒に長男を産みました。ところがしばらくして、この人に悪いくせがあることが分かり別れました。

その後、母と息子との3人暮らしになりました。3人暮らしでも3人の心は銘々ばらばらで自己中心。お互いに好き勝手に生きていたような気がします。その頃の私には、未来への希望は無く、ただ生きているという毎日死を望む程でした。

## 息子が変わった

そんな時、二十四歳になっていた息子が盲腸になり、近くの淀川キリスト教病院へ運ばれ手術を受けました。術後、手元に読物が何も無く、雑誌も買いに行けず、仕方なくベッド備え付けの聖書を読みました(この病院ではベッド毎に聖書が備え付けられていたのです)。第1ページを開くとカタカナの名前ばかりが並んでいて、「何だ?」と思いつつも読んで読んで読んで。そんな息子の所へ回診の先生(自分の担当医ではなく、たまたまカナダから帰ってこられたばかりの先生)が廻ってこられ、枕元にあった聖書を見て「聖書分かりますか」と聞かれ、「いや全然分かりません」と言うと、「退院したら教会へ行ったら良いですよ」と、教会を紹介してくださいました。

退院後、息子はひとり黙って教会へ行き、そしてその日に、自分の罪が分かり、イエス・キリストを救い主として信じて、クリスチャンになりました。

## 暑中お見舞い申し上げます (八月号は休刊させていただきます)

帰ってきたのです。同居していた母も私も驚きました。息子がまったく別人のようになっていたのです。それまでは、これ以上汚い言葉は無いだろうと思うほどの言葉を私たちに浴びせて罵倒していたのに、その息子が教会から帰ってきたその日から、言葉は優しく丁寧になり、態度は落ち着いた穏やか、人に親切になっていました。そして私に向かって「僕を生んで、今まで育ててくれてありがとう」と言ってくれたのです。

## 「これは人の業では無い」

ということとは分かりましたが、いくら考えても理解が出来ません。以来、息子は教会で聞いてきた話や聖書の事を私に話してくれますが、私はとうとうと、知ったかぶりの見当違い、屁理屈ばかりを言っていました。それでも息子は、更に熱心に謙虚に忍耐して話してくれるのです。

真理を確信して歩む息子の姿は私の目に清々しく、いつしか心惹かれるようになり、ある日、家の中に誰もいなくなった時、一体何が書いてあるのだろうと手近にあった聖書をパラッと開いて見るとそこにこう書いてありました。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」(ヨハネ5・39)。この時、背筋がぞつとして、思わず後ろを振り向いたのを今でも思い出します。その後息子に促され、

## 初めて教会へ

行ったのは、四十四歳、一九七八年の母の日です。聞いたお話の内容は余り良く分かりませんが、メッセージの終わりに「今日イエス様を信じ

たいと思う人は、手を挙げてください」という招きがありました。その時、私の手は自然に挙がっていました。集会の後、ひとりの人が近づいて来て話してくださいました。神様は悟りの鈍い私の心に深く語りかけてくださり、罪の重大さを示してくださいました。自分がそれまで知らず知らずに犯していた罪。母の苦しみなど思いやること無く、自分の事ばかり考え、自分だけが不幸だと考えて生きてきたことなどが思い出され、神様の前にお詫びし、イエス様を救い主と信じました。もう涙が溢れてきて止めようがありません。そのあと、罪が赦され心が清くされた喜びが心の中から溢れてきました。

それからは息子と一緒に教会へ行き、息子と二人でよくイエス様の話をしました。話しながら、この喜びを母にも知って貰いたいと思ひ、出掛ける毎に「一緒に行こう」と声を掛けますが「行かへん」の一点張り。

母はその頃、三〇年来ある新興宗教に入っていて私たちの方を見向きもしませんでした。母には分からないかも、と私は勝手に思うようになっていました。でもある日、また集会に行く用意をしながら「一緒に行こう」と誘うと、母からはいつものように「行かへん」と言う答え。私は諦めて一人で行くつもりでトイレに行き部屋に戻っていると、母が洋服ダンスを開けて着替えをしようとしています。「どこへ行くの?」と尋ねると「私も一緒に行くがな」と。私はうれしくて仕方ありませんでした。

## 涙、涙、涙、

集会中、隣に座る母の顔を何度も見ましたが、特に変わった様子は無く「お話、分かる」と尋ねる

と「分からん」と言う返事。色々思っているうちに集会は終わり、いつものように「今日イエス様を信じたいと思う人は」と招きがありました。母に動きはありません。お話が分からなかったのかなと思っていると、母のために一緒に祈り続けてくれた人が近づいてきて母に話しかけてくれました。すると、母の目から涙がポタッとこぼれ落ち、「信じませんか」と声をかけられると「はい、信じます」と答え、それからもう、涙、涙。私も涙が止まりませんでした。

不幸な夫婦関係に置かれて長い間苦しんだ母も、イエス様を信じる事が出来て、全ての重荷から解放され安らぎの生活に変えられたのです。母と私は一緒に洗礼を受けました。息子が救われて4ヶ月後のことです。

後日、母にその時のことを尋ねると「私は何年もあの宗教を信じてたけど、楽しいと思ったことはひとつも無かった。でもあんたらは、教会へ行くようになってから毎日楽しそうにしているのを見て、ずっと羨ましかったんや」と、話してくれました。母は洗礼を受けて四年後、七十五歳で天国へ行きました。

あれから三十九年、今では息子とその家族、孫やひ孫も与えられ、孫の中には牧師になる訓練を受けている者もいます。私たちを闇から光へ、苦しみから喜びの人生へ移し変えて下さった神様に、心からの感謝をお捧げします。

